

## 要旨

### 研究目的

周産期ドメスティック・バイオレンスの支援ガイドラインを基盤に、助産所の特性に応じた DV スクリーニング導入プログラム(以下導入プログラム)を計画、実施、評価し、より効果的なプログラム作成のための示唆を得ること。

### 研究方法

導入プログラムを計画、実施し、評価を得る評価研究である。研究者が現場の活動に参加し、研究協力施設の助産師(以下、助産所助産師)と導入プログラムを展開していくという点で、アクションリサーチの手法をとった。また本研究は聖路加看護大学倫理審査委員会の承認を得て、十分な倫理的配慮のうえ実施した。

### 結果

2ヶ所の助産所(A、B)において、導入プログラムを実施した。第1段階では助産所助産師への教育プログラムの実施、助産所のDV被害者支援のための環境整備を行い、第2段階ではスクリーニングの時期と回数、ツール、陽性者への支援などについて助産所助産師と方法を検討し、各施設1ヶ月間DVスクリーニングを実施した。スクリーニング実施率は、A助産所40.9%(22人中9人)、B助産所55.0%(20人中11人)。陽性者はいなかった。導入プログラム実施後、助産所助産師たちはDVスクリーニングを実施する意味、自身のDVに対する意識の変化を感じる一方、DVのポスターを掲示することに抵抗感があり、より助産所らしい雰囲気のポスターやカードを求めている。また、助産所では男性パートナーが妊婦健診に同行することが多く、妊婦をひとりにできないことから実施率が低かった。さらに、知識不足や経験不足から生じるDVへの抵抗感を語る助産所助産師が多く、防犯上の不安を感じている助産所助産師も多かった。しかし、今後のDVへの取り組みの可能性も語られ、助産師同士での話し合いのきっかけともなったとしていた。

### 考察・結論

助産所助産師は助産所らしい雰囲気を大切にしており、その雰囲気に合うポスター、カードなどの作成が必要である。また、助産所には防犯上の課題もある。警察やDV支援専門機関などとの連携体制を整備し、助産所を含めた周辺地域でDVに対応するシステムを構築していくことが必要である。また、助産所助産師に対してもDVに関する研修などが継続的に実施される必要がある。DVスクリーニング実施率は十分ではなかったが、産褥入院中や初診時は実施しやすかったと評価があり、施設のやり方にあった方法を検討することが必要である。助産所助産師からは、「意識が変わった」などの評価もあり、助産所におけるDVスクリーニングおよびDV被害者支援の啓発という点で大きな成果である。本研究で明らかとなった課題から助産所におけるDV被害者支援の環境を整えていくことで、助産所においてもDV被害に悩む女性が見逃されず、十分な支援をうけることができると考えられる。